

ツネ ログ

#12
2025年8月号



皆さん、こんにちは。

先日、ジーコ主宰のチャリティーマッチがエディオンピースウイング広島で開催され、私も参加しました。多くのお客さんが詰めかけた中、ジーコジャパンと一緒に戦ってきた選手たちとプレーでき、本当に素晴らしい時間を過ごせました。ジーコからは「今日はプレジデンチ(会長)ではなくカピトン(主将)だ」と言って送り出してもらいました。30分ハーフとはいえフル出場するとまでは聞かされていませんでしたが。

ロナウジーニョ、クアレスマ、セードルフら一時代を築いた世界のトッププレーヤーと対峙してみて、ヒリヒリしたピッチ内での緊張感みたいなものを久しぶりに味わうことができました。僕たちの動きを見ながら、ちょうどいいタイミングで僕たちが届かないところにパスが出てくるわけですから、さすがの一言では片づけられないプレーの質の高さがありましたね。

ジーコが20年以上にわたってブラジルで開催している「ジョーゴ・ダス・エストレーラス(JOGO DAS ESTRELAS)」を終戦80年・被爆80年となる日本で、そして広島で開催したいということでこのチャリティーマッチが実現しました。私も昨年、ジーコから「平和を発信していくため、このイベントと一緒に盛り上げてほしい」と直に依頼を受けていました。

試合前、平和の鐘が鳴らされ、私たちもピッチ上で黙祷しました。世界各地で紛争が起こっている今、この日本から平和の大切さを発信していかなければならないとあらためて感じた次第です。

思い起こせば中学生のときに修学旅行で大阪から長崎に行き、原爆資料館で戦争の悲惨さ、平和の尊さというものを心に刻んだ思い出があります。そしてジーコジャパン時代の2004年7月、キリンカップでスロバキア代表と広島ビッグアーチで試合をした際に、広島平和記念公園を訪れました。広島平和記念資料館では原爆が落とされ焼け野原になった写真、焼けた子ども服など展示されていた一つひとつが胸に突き刺さりました。

スポーツを通じてサッカーを通じて、融和、平和を訴えていく――。

国際サッカー連盟(FIFA)総会においてもそのメッセージが強く発信されています。社会をより良くしていく力がサッカーにはあると信じています。平和な世界なくして、スポーツを楽しむことはできません。

昨年6月にSAMURAI BLUE(日本代表)が20年ぶりに広島で国際Aマッチを行い、今年11月にはなでしこジャパン(日本女子代表)が出場するMS&ADカップ2025を長崎スタジアムシティで開催します。日本サッカー協会(JFA)としても広島、長崎で実施する試合において、平和を訴求していくために何ができるか、どんな発信をしていくべきなのかを考えていく必要があると思っています。終戦80年、被爆80年の節目に、平和の尊さを噛みしめるとともに、サッカーが貢献できる役割というものにしっかりと向き合っていきたいと思います。

公益財団法人日本サッカー協会 会長

宮市恒靖



会長の活動報告

2025年6月20日～7月17日(抜粋版)

6/22(日)

loanDepot park 視察(アメリカ/マイアミ)



メジャーリーグベースボール(MLB)のマイアミ・マーリンズの試合を視察しました。スタジアム内の飲食物の価格には驚きましたが、ヨーロッパとは異なるスタイルのスポーツエンターテインメントは新鮮で、学ぶところが多い視察となりました。

FIFA Executive Football Summit 2025 オフィシャルディナー(アメリカ/マイアミ)



翌日のサミットに先立ちFIFA、各大陸連盟、各国協会の役員が集った夕食会が開催されました。会議とは違うカジュアルな雰囲気での情報交換の場となりました。写真はFIFAのMattias Grafström事務総長です。

7/11(金)

47FA訪問会議(長野)



経営企画室の設置やブランド戦略など長野FAのユニークな取り組みについて話を伺いました。他のFAも含めてさまざまな良い事例を共有する機会を設けられればと思います。

7/15(火)

第79回東アジアサッカー連盟(EAFF)理事会、 第6回東アジアサッカー連盟(EAFF)臨時総会(韓国/水原)



EAFFの副会長に就任しました。「JFAの約束2050」を達成していくためにもFIFAやAFCにおいて日本、東アジアの存在感を増していくことが重要です。ASEANサッカー連盟とも連携して日本がアジアサッカーを牽引していけるよう努めます。

東アジアE-1サッカー選手権2025決勝大会 韓国 韓国代表 vs. SAMURAI BLUE(Yong-in Mireu Stadium)



Jリーグの選手たちだけでアウェイでしっかり勝ち切ることができたのは大きな結果。来年のワールドカップに向けてメンバー争いも激しくなってきますが、良い競争が日本サッカーのレベルをさらに上げてくれるはずです。

6/23(月)

FIFA Executive Football Summit 2025(アメリカ/マイアミ)



FIFA幹部、各大陸連盟の代表、各国協会の代表が出席し、グローバルな課題への取り組み、普及や育成、女子サッカー強化、各カテゴリーのワールドカップ開催についてなどさまざまなテーマについて議論と情報交換を行いました。

6/23(月)、25(水)、27(金)

在マイアミ日本国総領事館 表敬訪問(アメリカ/マイアミ)

在ロサンゼルス日本国総領事館 表敬訪問(アメリカ/ロサンゼルス)

在ニューヨーク日本国総領事館 表敬訪問(アメリカ/ニューヨーク)

各地の日本国総領事館を訪問し、来年のワールドカップ期間中のSAMURAI BLUEや現地を訪れるファン・サポーターへのサポートについてお願いをしました。

7/16(水)

韓国ナショナルトレーニングセンター 視察(韓国/天安)

東アジアE-1サッカー選手権2025決勝大会 韓国 なでしこジャパン vs. 中国女子代表(Suwon WC Stadium)



代表初選出のメンバーも健闘してくれましたが、球際の戦いなど国際試合の経験の少なさが垣間見られました。そういう部分を念頭に置きながらWEリーグの新シーズンにつなげてほしいと思います。

6/23(月)、25(水)、26(木)、28(土)、29(日)、7/1(火)

FIFA Club World Cup 2025 視察

Inter Miami CF vs. SE Palmeiras (ハードロック・スタジアム)

浦和レッズ vs. CF Monterrey (ローズ・ボール・スタジアム)

FC Salzburg vs. Real Madrid C.F. (リンカーン・フィナンシャル・フィールド)

SE Palmeiras vs. Botafogo (リンカーン・フィナンシャル・フィールド)

CR Flamengo vs. FC Bayern München(ハードロック・スタジアム)

Real Madrid C.F. vs. Juventus FC (ハードロック・スタジアム)



残念ながら浦和はグループステージでの敗退となりましたが、新しい方式で開催された本大会にJクラブが出場した意義は大きいです。今後も日本のクラブが国際大会で良い成績を収められるようサポートしていきます。

7/17(木)

9地域代表者会議、JFA理事会(JFAハウス)

理事会トピックス



2025年度第7回理事会が7月17日(木)、JFAハウスおよびWeb会議システムで開催されました。
詳細およびその他の決議・報告事項については、JFA公式ウェブサイトをご参照ください。

決議事項

「プロサッカー選手の契約・登録および移籍に関する規則」等を改正

選手契約制度について、①選手契約におけるABC区分を撤廃、②基本報酬の下限の設定、③初年度の年俸上限の緩和、④プロ選手の最少登録人数(20人)の設定、⑤登録数上限枠(プロA契約)の撤廃などに伴い、その具体的文言を規則に反映することにしました。施行日は2026年2月1日ですが、②と④は同年7月1日から適用されます。また、来季からのJリーグのシーズン移行に伴い、新たなシーズンの期間を「7月1日から翌年6月30日までの1年間」として再定義し、登録ウインドーとともに規則に反映します。

併せて、国内のトレーニング補償金(プロからプロ)に係る規定、その他手続規定を運用実態等に合わせて整理、適正化しています。なお、「女子プロサッカー選手の契約、登録および移籍に関する規則」「プロフットサル選手の契約、登録および移籍に関する規則」「サッカー選手の登録と移籍等に関する規則」「フットサル選手の登録と移籍等に関する規則」も同様の箇所があるため改正します。

技術委員会 委員の選任

JFA副技術委員長を務める小倉勉さんと川崎フロンターレ強化本部長の竹内弘明さんが技術委員会の委員として選任されました。

事務局の統括体制の変更

事務局の統括体制について、実態に合わせて責任や権限、名称等を見直し、新たに副事務総長を設置。事務総長補佐の西澤和剛さんを副事務総長として選任し、これに伴い「事務局組織運営規則」「事案決裁規則」を改正しました。

報告事項

東アジアサッカー連盟の会長、副会長を選出

第6回東アジアサッカー連盟(EAFF)臨時総会が7月15日に韓国の水原とオンラインで行われ、2022年-26年任期の残存期間のEAFF会長にCHUNG Mong Gyu 氏(韓国)、同副会長にJFAの宮本恒靖会長が就任しました。任期は2026年までになります。

「2025/26サッカー競技規則」を改正

6月19日付で発信した「2025/26年サッカー競技規則改正」に関して、国際サッカー評議会(IFAB)から、ペナルティーキックのキッカーがダブルタッチをした場合の進め方と試合結果の明確化が追加で通達されたため、関係各所に通達文書を発信しました。

Information

「JFAリスペクト・フェアプレーデイズ2025」を開催

JFAは今年も「JFAリスペクト・フェアプレーデイズ」を開催します。2008年に「リスペクトプロジェクト」を立ち上げて以降、リスペクトやフェアプレーの精神を普及・啓発することに取り組んできましたが、2014年からは毎年9月を「JFA リスペクト・フェアプレーデイズ」と位置づけ、各種活動を通じてその浸透を図っています。※7/2発表

RESPECT
大切に思うこと

大会・試合・イベントにおける リスペクト・フェアプレー宣言、リスペクト旗の掲揚

9月1日～30日、JリーグやWEリーグほか各種連盟や地域・都道府県協会が主催する大会・試合やイベントでキャプテンによるリスペクト・フェアプレー宣言を行い、リスペクト旗を掲揚

2025年度 リスペクトシンポジウム

9月13日、「暴力暴言の根絶～審判員へのリスペクト」をテーマに、JFAサッカー文化創造拠点「blue-ing!」&オンラインで開催

「リスペクトアウォーズ 2025」

ピッチ内外を問わず、リスペクト・フェアプレー精神溢れる取り組みをしている人々やその事象などにスポットを当てて表彰(「事業・取り組み部門」)。また、個人や団体でリスペクトのために取り組んでいる工夫も募集(「ちょっとした工夫部門」)。募集期間は7月2日～28日。発表は9月13日。

「U-18子どもパブリックコメント」「ユース審判員パブリックコメント」

子どもたちの声を直接聞き、誰もがいつでもどこでも安心・安全にサッカーを楽しむ環境づくりに反映させるため、アンケートを実施。併せて、ユース審判員に特化した調査も実施。期間は7月2日～8月20日、対象はサッカーに関わっている小学5年生～高校3年生。

「個人によるリスペクト宣言」、「リスペクトのあるいい話」を募集

「個人で行うリスペクト宣言」と「リスペクトのあるいい話」を募集してオウンドメディアで紹介。募集期間は9月1日～30日。

天然芝のグラウンド造成

「JFA Partnership Project for NOTO」

震災復興プロジェクト「JFA Partnership Project for NOTO」の一環として、7月5日、石川県珠洲市立三崎中学校の臨時グラウンドに17,000株ほどのポット苗を植え、天然芝グラウンドとして整備します。芝生化には「JFAグリーンプロジェクト」で推進するポット苗方式を採用。本企画を通して、仮設住宅に入居された方を含む地域住民と学校との連携強化と被災地の復興に貢献することを目指します。※7/2発表

JFAこころのプロジェクト～子ども未来プロジェクト 第1回「ゆめのたねの教室」

JFAは、日本財団(会長:尾形武寿)と共同で「子ども未来プロジェクト」を立ち上げ、その一環として日本財団の助成を受け、7月8日に東京都中央区立泰明小学校で初の「ゆめのたねの教室」を実施します。

JFAこころのプロジェクトが2007年から展開している「夢の教室」は主に小学5年生と中学2年生が対象ですが、この「ゆめのたねの教室」は小学3年生が対象で、「夢の教室」を低学年用にアレンジし「夢」や「目標」を持つきっかけとなる「好きなこと」＝「ゆめのたね」をたくさん見つける時間となります。「ゲームの時間」では、多彩なゲームを通じて子どもたちのがんばる意欲を引き出すとともに、失敗する子どもがいたとしてもそれを受け入れて励まし、次への挑戦につながる雰囲気を作成します。「ゆめのたね探し」の時間では、「好きなこと」が自身の人生にどのような影響を与えたかといった夢先生の経験談を聞き、児童が自分の好きなことや楽しいことを考え、書き出します。JFAは、この取り組みをきっかけに子どもたちが自己肯定感を高め、自分の足で未来を切り開いていけるようサポートしていきます。※7/4発表

その他の主なニュース

- ・「夏休み自由研究2025 サッカーを通して出来るSDGs」を開催(7/1発表)
- ・環境省制作の熱中症予防動画に宮本恒靖会長、森保一監督が出演(7/1発表)

“サッカーとフットサルの 関係性を密に”

JFAフットサルテクニカルダイレクター

小西鉄平さんを

マンマーク!

第12回はJFAフットサルテクニカルダイレクターの小西鉄平さん(技術委員会フットサル・ビーチサッカー部会長)とのフットサル対談です。今年5月、AFC女子フットサルアジアカップ中国2025で優勝を遂げ、11月に初開催されるFIFAフットサル女子ワールドカップ(フィリピン)出場を決めた日本女子代表の話から始まります。

宮本 アジアカップは準決勝でイラン代表に勝ってワールドカップ出場権を手にし、決勝ではタイ代表とのPK戦を制しての優勝でした。見ていてゾクゾクしましたね。

小西 ありがとうございます。本当に多くの方の応援、サポートがあって選手、スタッフがベストを尽くすことができました。皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。女子代表チームを立ち上げたときから、ワールドカップができたら優勝しようということを合言葉にしてきたので、そこに向かって頑張りたいと思っています。

宮本 ピッチ内のことばかりじゃなくてこれまでしっかりと強化なり、システムなりを継続して整えてきたからこそ今の活躍があるということをあらためて感じますね。

小西 (代表チームの)立ち上げ時に中心選手であった藤田安澄さんが今コーチとしてスタッフに入っていますし、チームとして積み上げてきたものが受け継がれています。日本女子フットサルリーグ(女子Fリーグ)の創設も大きい。年間通じてゲームをしながら、男子と同じようなプレースタイルを取り入れたりしているので、こういった部分が他国と差をつけることができている背景にあるのではないかと考えています。

宮本 男子の強化は現状どうでしょうか。

小西 JFAとして掲げている大きなマイルストーンが2036年のフットサルワールドカップで優勝すること。逆算しながら取り組みをしてきている中、昨年、ワールドカップ出場を逃がした後は前体制でのいいところを引き継ぎながらも新しい取り組みをやっていきましょう、と。苦手としている相手との意図的なマッチメイクもその一つです。3月にアスンシオンに遠征してパラグアイ代表と国際親善試合を行いました。過去4回試合をして一度も勝ったことがない相手に対して真っ向勝負をして1勝1敗。非常にいい強化の場となりました。

宮本 苦手になっているタイプと言うと?

小西 パラグアイもそうですが、圧倒的に1対1が強く、うまい相手ですね。食いついたらたかれるし、食いつかなかつたら運ばれる。特に南米のチームは局地戦の判断に迷いがないんです。パラグアイに1-3で敗れた遠征の2戦目は、本当にいいシミュレーションができたと思っています。

宮本 前線のポジション、ピヴォは独特ですね。バーモントカップ(全日本U-12フットサル選手権)を見たときも感じたんですけど、相手を押さえてボールを遠いところに置き、味方を使いながら起点になって、逆に相手が動いたらターンする。小学生であっても背負ってボールを受ける技術はすごいなって感じました。

小西 たとえばベルギー代表の(ロメル・)ルカク選手なんて相手を背負うプレーが得意ですね。ペナルティーエリア内で背負ってプレーすることを嫌がらないのは、フットサルから派生したところでもあるような気がします。

宮本 対応する守備のほうでも、どこまで体をぶつけばいいのかなど勉強になる。サッカーをやるにしても狭いスペースでどう動いたら、相手はこう動くとか、早い段階からいろんなことを学べると思うんですよね。

小西 フットサル側からしても、選手が選べるような環境がもっと整えばいいなと感じます。ポテンシャルエージである小中学生がサッカーでもフットサルでも、あるいはビーチサッカーをやる環境があって、最終的に自分が向いているものを選択していけばいいんじゃないかな、と。

宮本 どんな形であれ競技を楽しむ環境がないといけませんよね。われわれが掲げる日本型ダブルピラミッドにおいて「生涯スポーツ」の山で言うなら、サッカーもあるしフットサルもある、そんな状態になっていけば両方を続けていくのが当たり前みたいな感覚になっていくはず。フットサルは手軽にできるところが魅力。カジュアルだし、個サルでもやれるし、サッカーのコミュニティ、サッカーファミリーを広げるためにはすごく重要な存在なんです。だからこそたとえばJリーグとFリーグでもっと連携を図っていくとか、JFA2005年宣言で「2050年までにサッカーファミリーを1000万人にする」と謳っている以上、サッカーとフットサルの関係性を密にしていくことが大事になってくるのかもしれない。カズさん(三浦知良)はフットサル日本代表としてプレーしていたし、(松井)大輔もフットサルにチャレンジして、今は日本フットサルトップリーグの理事長として振興にも力を入れてくれています。そういう交流や協力体制がもっと深まってほしい。

小西 今、9地域、47都道府県のフットサル連盟さんにはわれわれの意向を汲んでいただいて、U-18、U-15世代の試合環境も充実してきています。競技環境を広げていかなければなりませんし、日本型ダブルピラミッドという望む世界観の達成に向けてFリーグを含めて皆さんとしっかり連携を図っていきたい。そのためにはシンボルである代表チームが結果を残していくとともに希望、勇気、活力を与えられるような存在になっていく必要があると思っています。本日はありがとうございました。



小西鉄平(こにし・てっぺい)

1977(昭和52)年10月9日生まれ。神奈川県出身。横浜スポーツ&カルチャークラブでプレー後、2008年よりフットサル指導者養成の道へ。フットサルミャンマー女子代表監督、FリーグU-23選抜監督などを歴任。15~21年はブラインドサッカー日本代表コーチも務める。15年よりJFAフットサルテクニカルダイレクター、10年よりAFCフットサルインストラクター。現在、技術委員会フットサル・ビーチサッカー部会長。

※次号は2025年9月発行予定/本誌クレジット表記のない写真: ©JFA、©JFA/PR、©Jリーグ、©WEリーグ

